

目標項目		重点的 対策	計画策定時 (H23年度)	中間評価時 (H29年度)	直近値 (R4年度)	目標値	最終 評価	
歯科口腔保健対策	ライフステージに応じた 要介護者	介護老人福祉施設・介護老人保健施設等での定期的な歯科 検診の実施率の増加	○	28.1%	50.0%	70.7%	100%	B
		歯科訪問診療を行う歯科医療機関の増加	○	219件	215件	237件	300件	B
		バリアフリー（スロープ・手すり）の歯科医療機関の増加 →車椅子利用者への配慮（施設内のバリアフリー化の実 施）をしている歯科医療機関	○	230件	218件	69件	300件	E (注2)
歯と口腔の健康づく りを支え、守るため の環境づくりの推進		「噛ミング30」運動の主旨を理解し、推 進に取り組む学校園・保育所・事業所等の 増加	○	4.3%	13.9%	46.4%	50%	B
		保育所・幼稚園	○	16.2%	36.4%	39.1%	50%	B
		学校	○	0%	0%	3.5%		B
		事業所等	○	219件	215件	237件	300件	B
		歯科訪問診療を行う歯科医療機関の増加	○	230件	218件	69件	300件	E (注2)
		バリアフリー（スロープ・手すり）の歯科医療機関の増加 →車椅子利用者への配慮（施設内のバリアフリー化の実 施）をしている歯科医療機関	○					
		職場で歯科検診を行っている事業所の増加		1.3%	3.2%	1.2%	15%	C

(注1) 計画策定時と中間評価時で集計方法が異なっているため、中間評価時の値と直近値を比較した上で、B評価としました。

(注2) 「おかやま医療情報ネット」から数値を取得していますが、計画期間中に項目の定義が変わったため、E評価としました。

(3) 最終評価のまとめ

ア. 重点的歯科口腔保健対策

(ア) 歯と口の働き（口腔機能）の健全な育成

健全な食生活を推進するために提唱された「噛ミング30」運動の主旨を理解し、「ひとくち30回以上噛む」等、よく噛んで食べることに取り組む学校園・保育所・事業所等は増加し、中学生で歯列・咬合・顎関節に異常のない者は、わずかですが増加しました。

(イ) 口腔機能の維持・向上

口に関するささいな衰えを放置したり、適切な対応を行わないままにしたりすることで、口の機能低下、食べる機能の障がい、さらには心身の機能低下まで繋がる負の連鎖が生じてしまうことに対して警鐘を鳴らした「オーラルフレイル」の概念を市民に理解してもらい、市民が口腔機能の維持の重要性に気づき、全身の健康につなげるために、口腔機能健診の受診を促すとともに、口の体操の普及に取り組んできました。しかし、60歳代で約4割の人の口腔機能が低下しており、60歳以前から口腔機能の維持に関して取り組む必要があります。

一方で、口腔機能の低下により、食事が飲み込みづらい、噛めないといった問題に対応する摂食機能療法を行う歯科医療機関は増加しており、高齢者人口の増加により、今後ますます摂食機能療法のニーズが高まることが見込まれます。

引き続き、市民をはじめ、歯科医療専門職と共に、口腔機能の維持・向上に関する取組を進めていく必要があります。

(ウ) 障害者（児）、要介護者の口腔の健康の保持・増進への取組

施設職員を対象とした口腔ケアに関する研修会を行う等の取組を進めてきた結果、施設における歯科検診の実施率は、増加しましたが、目標値には届きませんでした。引き続き、施設への働きかけが必要です。

一方で、在宅で生活する障害者（児）や要介護者への取組としては、訪問による対応や障害者（児）、要介護者が受診しやすい環境づくりが求められます。歯科訪問診療を行う歯科医療機関数は、わずかに増加していますが、引き続き、障害者（児）や要介護者が、受診しやすい環境整備が必要です。

イ. ライフステージに応じた歯科口腔保健対策

(ア) 乳幼児期および学齢期

岡山市では、妊婦・パートナー歯科健康診査を実施し、生まれてくる子どもの歯と口の健康づくりをすすめるための保健指導を行うとともに、親子手帳に1歳での歯科検診を促す項目を入れ、幼児期早期からかかりつけ歯科医を持つことを推奨してきました。その結果、乳幼児期の定期的なフッ素塗布がすすみ、乳歯のむし歯は減少しました。しかし、永久歯が生えてくる中学校1年生までに、半数の人にむし歯ができ、歯肉炎を認める中学生も一定数存在する等、口腔内の状況は悪化しています。また、新型コロナウイルス感染症の流行の影響もあり、集団でフッ素洗口を行う学校園は減少しました。

「むし歯」という、有病率の高い、全ての人に共通の課題となる病気に対して、集団での対応ではなく、個人の口腔の状況に合わせた対応が求められています。

(イ) 成人期および高齢期

職場で歯科検診を実施している事業所は増えていませんが、成人期・高齢期に歯科検診を受診している人は増えており、個人で歯科医療機関を受診しているようです。「80歳になっても自分の歯を20本以上保とう」という「8020運動」が浸透し、歯を大切にする意識が高まった結果、40歳で喪失歯のない人や60歳で24本以上自分の歯を有する人は増加しており、歯が保たれるようになってきています。

一方で、ケアしなければならない歯が多くなった影響により、歯周病の人は増えており、今後さらなる歯周病対策が必要です。

新型コロナウイルス感染症対策により、マスクを着用したり、会話をする機会が減ったりしたことで、口腔機能の育成や維持に悪影響を及ぼしていることが考えられます。誰もが生涯を通じて、食事や会話を楽しむことができるよう、口腔機能の育成や維持・向上に関するさらなる取組が求められます。

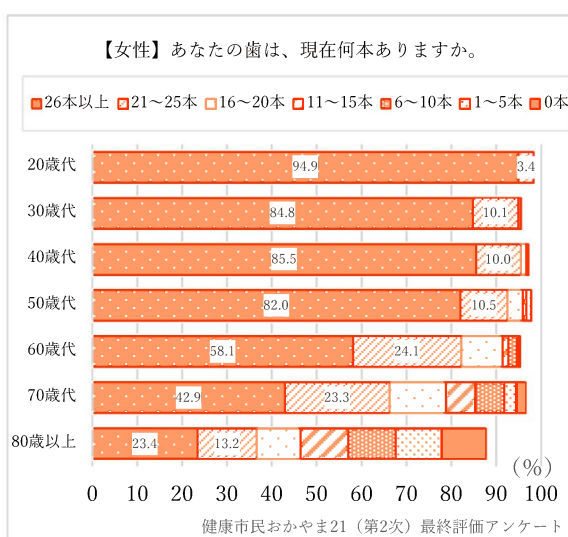
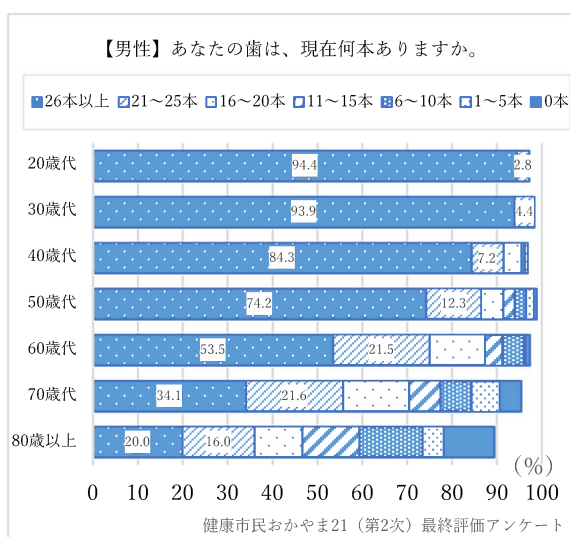
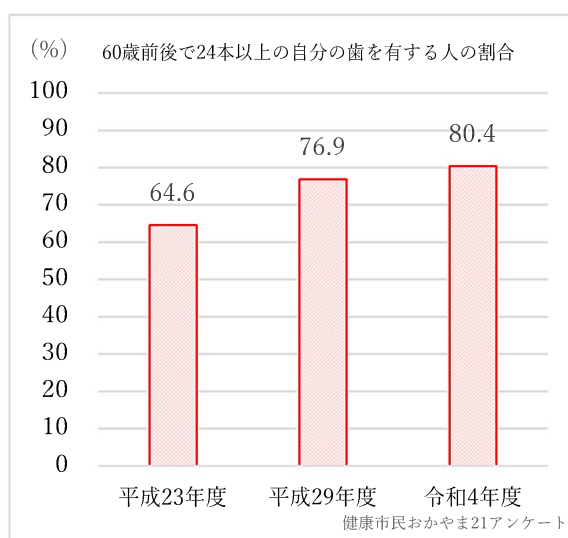
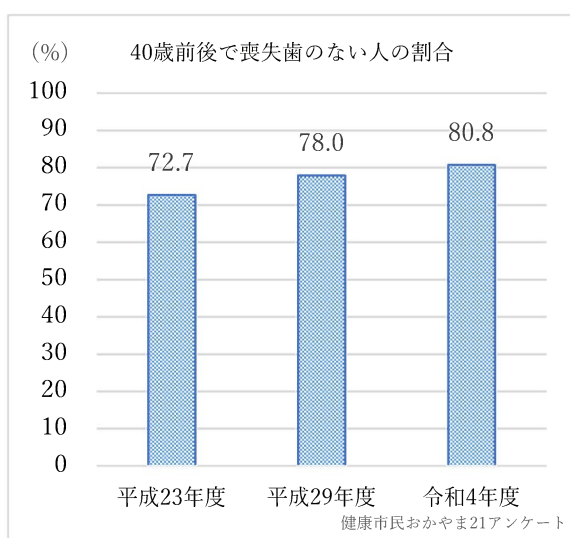
		評価区分（再掲含む）					評価
		A	B	C	D	E	
重点的 歯科口腔 保健対策	歯と口の働き（口腔機能）の健全な育成、機能の維持・向上	2	4	0	0	0	<ul style="list-style-type: none"> ・咬合に異常のある中学生の割合は極めて少ない。 ・60歳代の約4割に口腔機能の低下が認められる。 ・摂食機能療法を行う歯科医療機関は増加しているが、少ない。
	障害者（児）、要介護者の口腔の健康の保持・増進への取組	0	3	0	0	1	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者（児）入所施設や介護施設における検診の実施率は増加している。 ・訪問診療を行う歯科医療機関はわずかに増加している。 ・施設内のバリアフリー化を実施している歯科医療機関は少ない。
ライフ ステージ に応じた 歯科口腔 保健対策	乳幼児期	0	3	0	1	0	<ul style="list-style-type: none"> ・約半数の園で、「よく噛んで食べること」を推進している。 ・フッ素塗布を受けている幼児の割合は、増加している。 ・乳歯のむし歯は減少している。 ・フッ素洗口を実施する園は、減少している。
	学齢期	1	2	1	1	0	<ul style="list-style-type: none"> ・「よく噛んで食べること」を推進している学校は増えている。 ・中学校入学までに、二人に一人は永久歯にむし歯ができています。 ・歯肉に炎症所見を有する中学生の割合は変化がない。 ・フッ素洗口を実施する学校は減少しているが、新たに取り組む中学校もできた。
	成人期・妊娠期	2	3	0	1	0	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な歯科検診の受診者数や歯数が維持できている人は増えている。 ・歯周病を有する人は増加している。
	高齢期	1	3	0	0	1	<ul style="list-style-type: none"> ・60歳代の約4割に口腔機能の低下が認められる。 ・定期的な歯科検診の受診者は増えている。
	要介護者	0	2	0	0	1	<ul style="list-style-type: none"> ・介護施設における検診の実施率は増加している。
歯と口腔の健康づくりを支え、守るための環境づくりの推進		0	4	1	0	1	<ul style="list-style-type: none"> ・「よく噛んで食べること」を推進している事業所は少ない。 ・企業における歯科検診は、実施率は低い。

第2章 岡山市における歯科口腔保健の現状と課題

1 歯の数

40歳前後(35~44歳)で喪失歯のない人(28本以上の自分の歯がある人)の割合や60歳前後(55~64歳)で24本以上の自分の歯を有する人の割合は増加しており、歯が保存されていることがわかります。

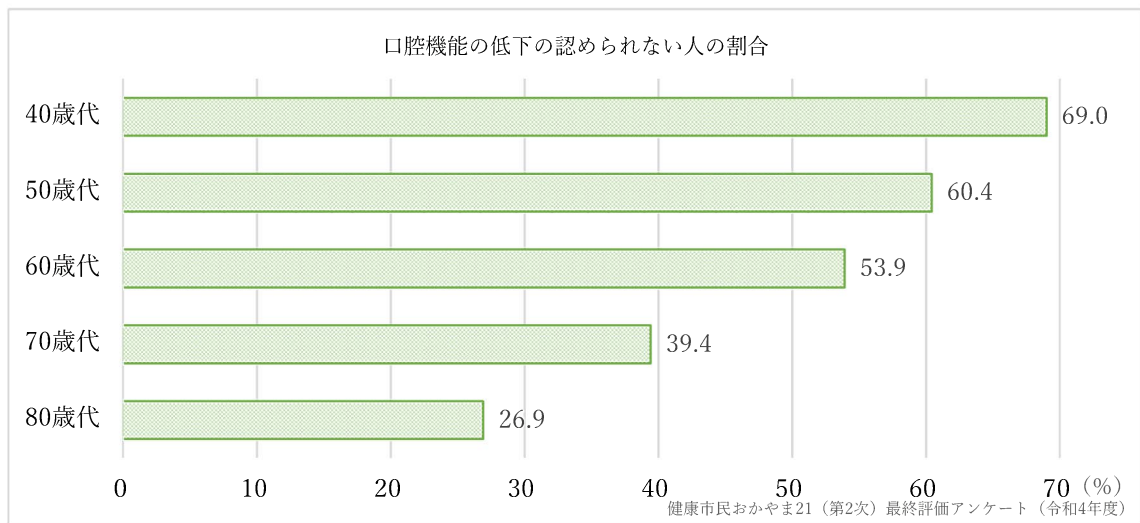
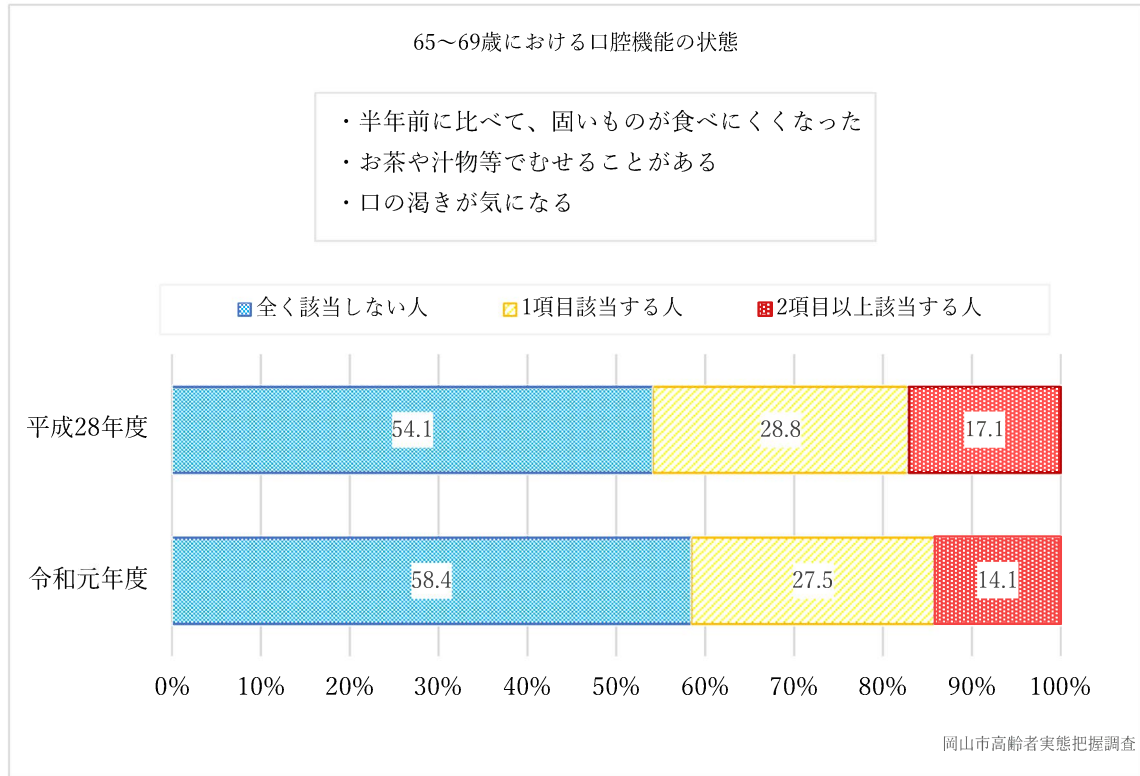
歯が無くなると、食べ物が咀嚼できなくなるだけでなく、はっきり発音できなくなります。生涯を通じて、食事や会話を楽しむためには、歯は必要ですが、適切なケアをしなければ、むし歯や歯周病になってしまいます。歯をよりよい状態で保ち、口腔機能を維持することが重要です。



2 口腔機能の低下

「半年前に比べて、固いものが食べにくくなった」、「お茶や汁物等でむせることがある」、「口の渇きが気になる」の3つの項目のいずれにも当てはまらない人は、65～69歳では6割弱で、その割合は、年齢が高くなるにつれて減少しています。

40～50歳代から、口腔機能の維持に関する対策をすすめていく必要があります。

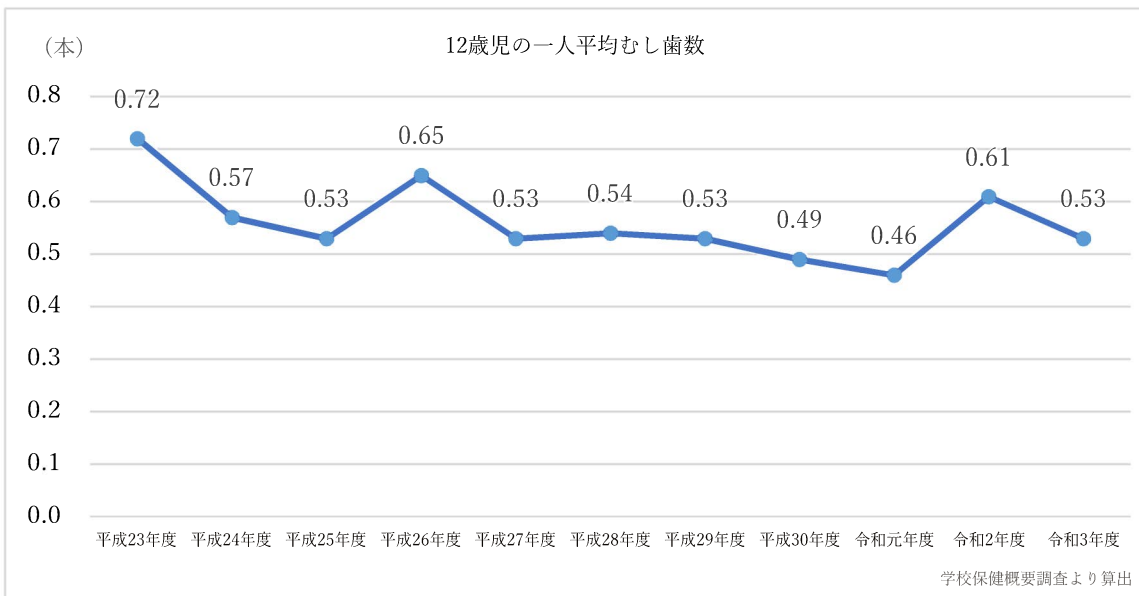
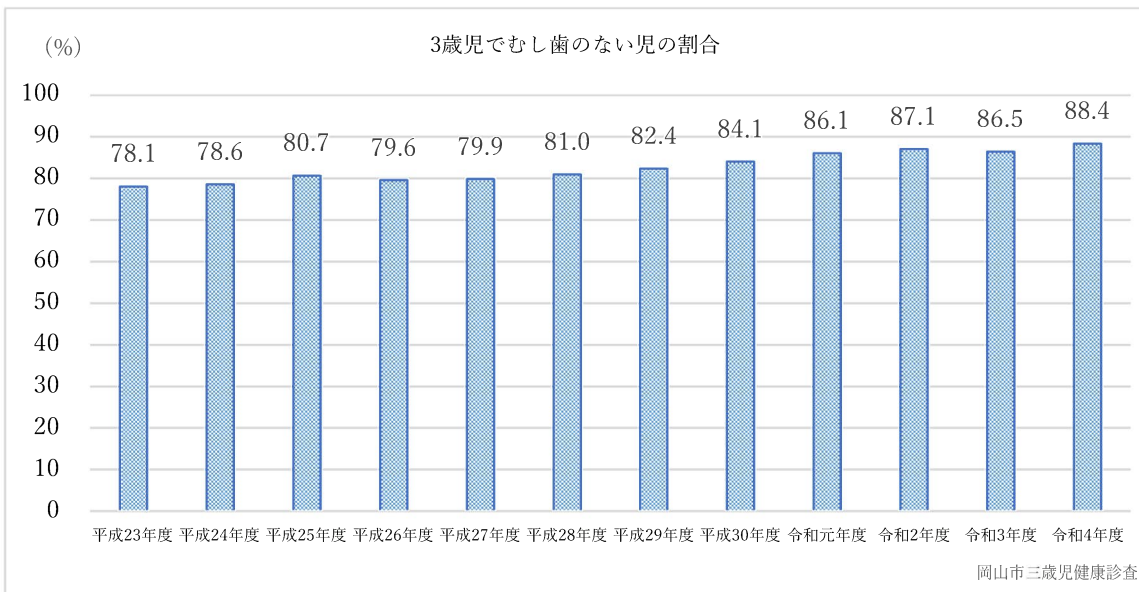


3 乳歯と永久歯のむし歯

三歳児健康診査時にむし歯のない児は増加しており、乳歯のむし歯は減少しています。

一方で、12歳児（中学校1年生）の永久歯の一人平均むし歯数（未処置・治療済・抜歯の合計）は、増えたり減ったりを繰り返していて、最近10年間では、あまり減少していません。中学校1年生の二人に一人は、永久歯にむし歯ができています。

一度むし歯になってしまうと、治療してもむし歯になる前の状態には決して戻りません。永久歯にむし歯ができないような取組が必要です。

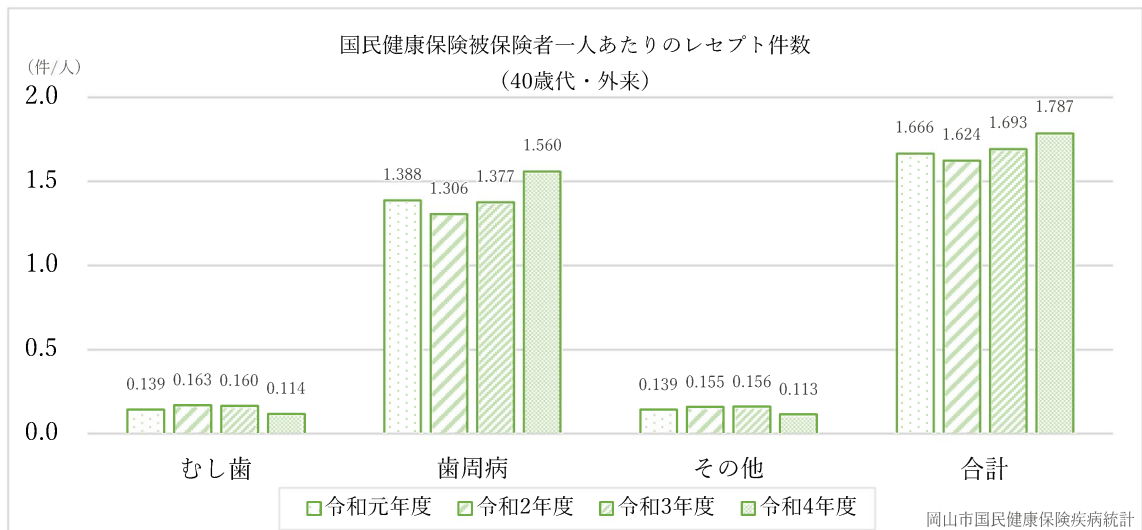
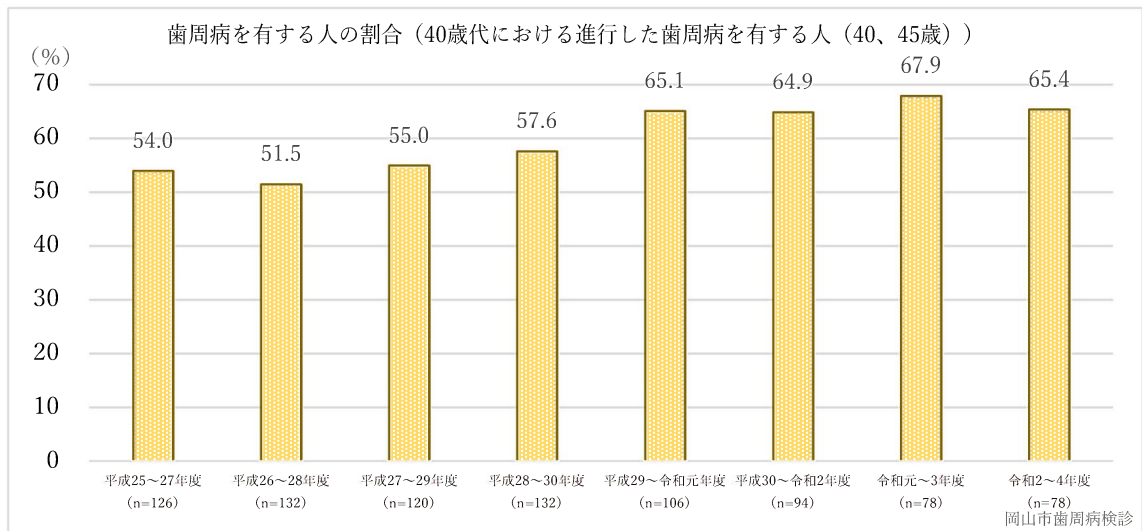


4 歯周病の人の増加

岡山市歯周病検診の結果によると、4mm以上の歯周ポケットを有する40歳代（40・45歳）の人が増加していることがわかります。

国民健康保険のレセプト件数によれば、歯科医療の受診状況は、令和2年度以降は、増加傾向にあり、中でも歯周病の治療を受けている人が増えています。

歯周病は、日常的に行う歯磨きや歯間ブラシの使用等によるセルフケアに加え、定期的に歯科を受診し、自身では磨ききれない部分を磨いたり、歯石を除去したりするプロフェッショナルケアとの両輪で、ケアすることが必要です。全ての人々が、定期的に歯科を受診する取組を今後もすすめていく必要があります。



5 岡山市の歯科医師数

岡山市の歯科医師数は、政令指定都市・特別区の中で、4番目に多く、歯科医療機関にアクセスしやすい環境です。

三歳児健康診査の時点では、約7割の幼児が「フッ素塗布を定期的に受けている」と答えており、幼い頃は、かかりつけ歯科医を持って、定期的に歯科を受診していることがわかります。

しかし、その後、大学進学や就職等、ライフスタイルが大きく変化する20歳代から40歳代にかけて、歯科の受診機会が減少し、その後、徐々に受診割合が上昇する傾向がみられます。

歯と口腔の健康を維持するためには、定期的に歯科受診し、疾病を早期に発見するだけでなく、フッ素塗布や歯磨き指導等の適切な予防処置を受けることが必要です。20～40歳代、特に男性の受診割合を落とさないような取組が必要です。

